（前のページから）

会長という立場で金城さんが思っているのは、ひとつの家族会のはずなのに、実質いまはふたつに分かれているように感じられる、精神と知的の家族たちを、あらためて本当の意味でひとつにしていくことだそうです。

もしかしたら、「すみわけ」のようなことが無難なのかも知れませんが、それでも「親なきあと問題」のような共通の関心もあります。とはいえ、同じ障がい同士だったとしても、当たり前のことながらひとりひとりの体験はそれぞれに違っていますし、なにより特に問題が解決しないとしても、ただ集まってしゃべることが人を元気にするということを、今回お話を聞きながら自然と笑顔になっていくゆいハート家族会のみなさんを見ていて強く思いました。

70歳になったので会長を退（しりぞ）いたという高安さんの「人はしゃべらないと」という言葉が、家族会活動の本質を示しているように感じました。（増山）

“一神教と国家、また人間の幸福についての考察”

イスラム法学者が書いた、イスラム的な考え方についての本である。

日本で育ち暮らす私たちは、たいていいつでも「他人の目」に対して無頓着でいられない。なにをするのでも他者からの評価を気にして、自分が納得できるだけの承認を求めている。自分自身の存在を認めることを、世間からの承認という「条件付け」によるならば、その人は隣にいる他人に対しても同様の眼差しを向けるのではないだろうか。

『みんなちがって、みんなダメ』
中田孝著（KK ベストセラーズ）

イスラムの価値観では、すべての存在は神によってあらかじめ承認されていて、それ以上でもそれ以下でもない、というシンプルな話。

イスラム教だけでなく、一神教の信仰とは本質的にそういうものだと感じる。

日本人の多くが他者評価や世間の目を気にし過ぎて悩むのは、私たちが神様を持っていないせいかも知れない。（増山）